

部落問題文芸作品選集

第32卷

村上浪六著
いたづらもの(下)

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三十二卷

定價は箱帯に表示

昭和五十一年六月十日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七二三)九二四四

振替 東京 四一七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

後編

貧乏と苦勞が嫌で堪らぬといふものあれど、これは華族が嫌で堪らぬといふ松川廣行、

かせいでも働いても生活難の今日、手腕があつても學問があつても就職難の今日、いかに奮闘するも努力するも運命の神に憎まれては智慧も工夫も用に立たざる今日、そもく祖先以來の餘慶に寝て居て食へる華族が何のために嫌で面倒かといへば、その理由よりも我この性質に於て只かくの如しとは、やはり世間に對して辯解の面倒を省き申譯の手数を嫌がる本人の拾言葉、強ひて問へば、蟲が好かぬと空を喰く、

顔色蒼ざめて十年の苦學に猶いまだ下宿料の催促を防ぎ兼ねたるものゝ眼より
今この松川廣行を見れば、つまり世間しらずの爵當りなり、あたら學士の肩書
に卵子の折函を添へて走り廻るものゝ眼より今この松川廣行を見れば、つまり
大名種に生れし我まゝ育ちの好奇心なり、さらに同族の朋友間より今この松川
廣行を見れば、みづから進んで廢嫡せられし狂氣沙汰、加之も子爵の名譽と財
産とを一人の女に振代へし馬鹿者なり、
されど本人の廣行、ふゝんと鼻の頭に軽く笑うて曰く、醫者は死體の解剖すれ
ど、生きた乃公が、彼奴等のために解剖されて堪るものかと、

松川家は子爵中の第一、全華族を通じても恐らく五本の指に數へらるゝ富を有
して、堂々たる練塀に圍まれ魏々たる和洋折衷に築かれたる中六番町の屋敷も

我より進んで廢嫡を迫りし廣行の心には、今この上野の森影に借屋住居の簡易生活、いかに人生の趣味深きぞ、殆ど一種の囚はれより脱れ出でたるが如く、いち／＼出入の大玄關に送迎せられて道路に制限ある馬車や自動車に運ばるゝよりも、いたるところ自由自在に二本の健脚、もし勞れし時は四通八達の電車あり辻傳あり、家に歸れば不自然に平蜘蛛の真似をする三太夫の面でなく、生涯を我ために捧げし最愛の妻が笑顔に迎へられて、夕飯の膳の上に真心を籠めし手料理の一品二品、おもはず舌鼓を打ちながら離憚らぬ談笑の境涯、いかに面白く樂しきぞ、

されど只これ一時の假住居に我身の置きどころ、きのふに勝る今日の趣味と快樂のみ、

松川廣行、もし此まゝの境涯に甘んじて此まゝの快樂に終れば、いはゆる醉生夢死の徒、たゞ華族の子息が我まゝに家を飛び出して好いた女と其日其日を暮

らすのみの事、昔は風流の若隠居、今日は戀愛小説の口繪に等しけれど、この廣行が華族の門を出で、赤裸々の一平民となりしには、社會に對する存在の意味上、その平民となるだけの主義あり本領あり覺悟あり、之も風流の若隠居とし戀愛小説の口繪としては、容貌性格、あまりに不似合なる大膽の細心と驚くべき案外の奇策縦横とを備へて、世の中の戰場に武者振ひの勢ひ、また餘りに鮮明すぎたる男、いづれにせよ、うき世を忍ぶ戀の宿かと思はるゝ今の境涯は、この松川廣行を容るゝに狭く小さく頗る不調和の背景なり、たと廣行がために生涯を通じて遺憾なく調和せるものは、妻として良人に冊く朝夕のキタ女のみ、

名畫より脱け出でたるが如き天生の容色品位、たとひ其まゝ華族の夫人としても、つゝまやかに身を持ちて晴がましき虛榮に憧れぬ自然の性質、今この境涯に世話女房としても、いぢらしく哀れげの中に雄々しきとろありて物に動か

ぬ點は、もしや不幸の運命に落ち果てし曉その艱苦に伴ふ貞女の妻としても、
そもや十九の年より過ぎて還らぬ二十六の昨日まで、あたら花の色香を惜しま
るゝ世間の春にも見せず、日蔭の埋れ木に捨て置かれし時さへ、をりゝ通ひ
來ませる君の姿を女一代の冥加として、世の一口に賤しき妾といへど、我は妻
ある人に弄ばるゝ身でなく、妻なき人の戀に靡きし身、情は猶更ら名のみの冷
き夫婦よりも暖に、いづこの誰をか羨むべき、いづこの誰に恥づべきぞ、此ま
まの生涯を世に交はらずとも、君たゞ一人を萬人の力草とせしキタ女、まして
今は晴れて妻と呼ばれ良人と呼ぶキタ女、
月も花も廣行たゞ一人に宿せり、戀も情も廣行たゞ一人に盡せり、身に飾る珠
玉の光りも、世に競ふ榮華の誇りも、廣行たゞ一人に代へ難し、
このキタ女に良人とせらるゝ松川廣行は、社會に向うて志いまだ達せず力い
まだ伸びざるも、天下幾萬の家庭に人しれぬ悲慘を含める今日、妻として理想

の妻は既に得たり、

萬事に重々しき極彩色の華族より脱し來りて、家風も形式もない上野の森影に
閑靜なる初音町の假住居、老少の下女二人に夫婦たゞ二人の主従四人、親戚に
保管せらるゝ六萬圓の五分利三千圓を月々二百五十圓づゝの生活費に當てゝ、
春の花も秋の月も居ながらに見る氣樂さ、葉越しに漏れ來る夏の涼風を午睡の
手枕に通はせ、樹々の梢に積る冬の雪を寒からぬ置炬燵に眺めて、浮世の萬人
に誇るべき才色兩全の妻を持ち、おのが心のまゝなる書を讀み身を養ひ、誰に
憚らず物に煩はされず天地たゞ我物の境涯、これでは以上の希望さへなくば、
松川廣行、もはや人生に何の不足もなし、
されど今この境涯を殆ど一種の化石視して、人生に無意味とせる廣行がために

は、やがて蒼空へ飛ぶべき羽翼を休めて暫し假寐の巢なり、

其 一

春の夕ぐれ、古風に花ちる入相の鐘の音は、芝の山内と今この上野に残りてぶら／＼と例のステッキを引き摺りながら歸り來れる廣行、

このステッキを引き摺る音と、こつ／＼門口の敷石を二三度、軽く無心に叩く癖とは、人しれぬ戀に忍び來りし時も、外に家なくて歸り來る今も、待ち兼ねし身は、微妙の音樂、

はや入口の障子を開けて、飛び立つ心を靜に迎へ出るキタ女、ことし二十六といへど、知らぬものゝ眼には二十一、いかに近寄りても三か四か、もし當世風の香粉に歳月を儼み取る人爲的の裝飾を施せば、すぎし十九の昔も今も同じ

美の神に包まれて、くつきりと牙え渡る肉色の頬に堪へられぬ微笑を浮べ、わざと作らず聊か太く濃き眉に却つて卑しからぬ自然の品位、いき／＼と張り切る目元に得もいはれぬ愛嬌の顔越、これで藝妓ならば絶えず年中の殺人罪なり、

「お歸り遊ばせ」

廣行、無言に首肯いて、隻手に取りし帽子を渡しながら、すつと其まゝ二階へ上れば、糸に引かるゝ如く續いて妻のキタ女、

上りて三疊、襖越に六疊あれど、八疊の座敷を晝は書齋に夜は臥房の境涯、寧ろ暢氣に打寛いで、床柱を背に當てし大胡坐、歸れば例となれる妻の手前に薄茶一碗、ぐつと一息の無雜作に飲み乾して、

「も少し早く歸らうと思ツたが、青山へ廻ツて遅くなツたよ」

「青山、あの西田様で御坐いますの」

「さうだよ、しかし人間の氣といふものは妙なもんだね、まだ廢嫡以來、さ

う長くもならないが、儲、かうなつた今の境遇から行ツて見ると、大きな冠木門に伯爵といふ西田の表札が白癡おどしの眼を剝いたやうで、何だか一種の滑稽じみて見えるせ、はゝゝゝ兎も角も飯を食はしてくれ、腹が空いたよ、幸ひ夕食に近いから久しぶりでは非にと引き止めたがね、つまらない献立で嫌な奴に四角張つた給仕しられるより、少々は不加減でも、やはり汝の手料理が美味いね乃公には、腹が空いた腹が空いた、べこゝだ」

「はゝゝゝ只今、すぐに差上げますが、外様と違ひ、第一の御親戚でもあり、また月々の事お世話を下さる方ですもの、折角、さう仰しやるのを良人のやうに、御自身ばかりの御勝手に、さう無愛想になさるもンでは御坐いませんよ、御馳走になツて入らッしやれば宜しいに、無理に私の不加減を召上らずとも」

「や、とんだところで、やられた、決して不加減ぢやアない、有難く頂戴す

るから早く出してくれ、贅澤は無論いはないが、けふは何だ」

「お晝飯に三品も差上げましたでせう」

「晝の事ぢやアないよ」

「ですから今夜は、一品で御辛抱あそばせ」

「するく、一品で辛抱するから早く頼む、しかし一品は何だらうね」

「御覧になれば、わかりますよ」

「御覧にならない先、ちよいと聞きたいよ」

「ほくくまるで小兒のやうです事ね」

「英雄また時に兒戲を學ぶだ、人事一切の不自然を取ツて退けた汝の前では小兒だよ、この小兒よく保護をしてくれ、あまり遅いと泣き出すぞ」

「ほくくどんな泣き聲で御坐いませう」

「わあッ」

いかに戯けても、いかに馬鹿げても、世間普通の人間、こゝまで調子外れの無遠慮に馬鹿げ得らるゝものでなし、まして床柱に背を寄せ兩腕を組んで眞面目な顔に俄の大口を開きながら、

かゝる馬鹿馬鹿しき事、門外一步の他人に對うては酔うても狂うても出來ぬ筈、心の底まで打解けて我身に許し給へばこそと、その呵しさよりは嬉しさの彌増すキタ女、

我前に運ばれし膳の上を、廣行ちらと見て、はや箸を隻手に隻手の飯茶碗を差出しぬ、

「はゝア、お手料理の一品、これかい、煎鳥だな」

「はゝゝゝたまには良人、さういふ一品の方が宜しう御坐いませう」

「宜しう御坐いますがね、こりやア煎鳥でなく煎午房と煎蒟蒻だぜ、どこへ通げたか鳥の所在が頗る不明瞭だ、よほど追窮しないと捕まらない」

「お晝飯に良人、さんざ鳥を召上ったでは御坐いませんか、その餘分ですもの」

「なるほど、よくいへば二度の勤めで、わるくいへば捨場に困った食ひ餘りの廢物利用だね、段々と汝も、世帯人になつて來たよ、この分ちやア、いくら乃公が貧乏しても大丈夫だ、はゝゝゝしかし煎午房、なかゝ食へる、煎午房も、なかなか美味い」

元來の大食、まして空腹の夕飯、饒舌りながら普通の三人前以上、これだけでも舊式の大名家族を嗣ぐには不合格の男、そろゝ後で帶を弛め出す無作法に至つては、いよゝ金屏風の殿様に不似合なり、

食後の帶を弛めし時、その懷中より掴み出だせしは、紙にも包まぬ裸の百圓紙幣三十枚、妻の前に抛げ遣りながら、

「おい、それを仕舞つて置いてくれ、三千圓あるよ」

「良人、此お金は」

「今日、青山の西田から借りて来たんだ」

「どうしてで御坐います」

「どうもしない、ちよいと入る事が出来たからさ、理由は後で話すが、今日その三千圓を借りるに就いて、よほど面白かったよ、父の慈愛に賜はった例の六萬圓を保管してるからね、いづれ何か面倒な事を言ひ込んで来る乃公と思つて居たんだう、早呑み込みに、あの中の三千圓と心得て、すぐに承知したが、いや、あれは廢嫡の砌、親戚立會の上お預け申したもので目下の境遇に應じた月々の利子を頂戴する外、一文たりとも手を著けませン、もし廣行が其中の幾何をと願へば當然お叱りを蒙るべき筈の金と心得ますから、別に三千圓お手許より借りたいと祈り込んでやつた、はゝゝゝとところで三千圓、何に入用だといふから、もし其費途を聞いた上で貸さう

といふ事なら、それを聞かずに斷然、おことはり下さいと一本、まゐつた時の面が呵しかつたね、貸す奴が借りる奴に逆捻を食つて狼狽へた工合、よほど變に妙だつたよ、はゝゝゝ加之も今年の十月に必ず返済するといへば、ますゝ煙に巻かれてね、それにも及ばないといふから、また一本、まゐつてやつた、わづか三千や五千の端金で返済の期日を間違つちやア其方より此方が勘定に合はない、同じ間違ふくらゐなら、せめて五十萬か百萬圓、それも外に何か面白い立派な間違ひやうでもあればだが、單に金だけでは少々、惜しいやうな氣がして間違ひ兼ねますと、眞正面から吹き倒して來たが、あとで考へて見ると、あまり手厳しく吹いて、聊か氣の毒だつたよ」

「まア良人、何といふ事を、現在お金を借りるに、そんな勝手な理窟が、よく仰しやれましたねエ」